

第 35 回 これからの学術情報システム構築検討委員会 議事要旨

1. 日時:2023 年 1 月 30 日(月)10:00-12:00

2. 場所:オンライン会議

3. 出席者(敬称略):

| | |
|-------|--------------------------------|
| (委員長) | |
| 大向 一輝 | 東京大学 大学院人文社会系研究科 准教授 |
| (委員) | |
| 綾部 輝幸 | 東京大学 附属図書館 柏地区図書課長 |
| 相原 雪乃 | 名古屋大学 附属図書館 事務部長 |
| 粟谷 禎子 | 公立ほこだて未来大学 情報ライブラリー |
| 安達 匠 | 國學院大學 学術メディアセンター事務部 図書館事務課長 |
| 竹澤 紀子 | 早稲田大学 図書館調査役(電子資料担当) |
| 飯野 勝則 | 佛教大学 図書館専門員 |
| 塩崎 亮 | 聖学院大学 基礎総合教育部 教授 |
| 児玉 閱 | 大妻女子大学 教職総合支援センター(図書館学課程) 特任教授 |
| 吉田 幸苗 | 国立情報学研究所 学術基盤推進部 学術コンテンツ課長 |
| 上村 順一 | 国立情報学研究所 学術基盤推進部 学術コンテンツ課 副課長 |
| (欠席) | |
| 鹿田 昌司 | 近畿大学 大学運営本部 中央図書館学生センター 事務長 |
| 福島 幸宏 | 慶應義塾大学 文学部 准教授 |
| (陪席) | |
| 竹谷喜美江 | 国立情報学研究所 学術基盤推進部 次長 |
| (事務局) | |
| 村上 遥 | 国立情報学研究所 学術基盤推進部 学術コンテンツ課 係長 |
| 三村 千明 | 国立情報学研究所 学術基盤推進部 学術コンテンツ課 係員 |

<配付資料>

委員名簿

第 34 回これからの学術情報システム構築検討委員会 議事要旨

- 1-1. システムモデル検討作業部会 2022 年度活動について(報告)
- 1-2. ユーザーグループの試行について(報告)
- 1-3. システムワークフロー検討作業部会 2022 年度活動報告(報告)

- 1-4. これからの学術情報システム構築検討委員会 2022 年度活動報告(報告)
- 2-1a. 新作業部会の設置とシステムモデル検討作業部会の廃止について(審議)
- 2-1b. 規程改定について(審議)
- 2-2. 新作業部会 2023 年度活動計画(審議)
- 2-3a. システムワークフロー検討作業部会 2023 年度活動計画(審議)
- 2-3b. システムワークフロー検討作業部会 2023 年度活動計画 別紙(審議)
- 2-4. これからの学術情報システム構築検討委員会 2023 年度活動計画(審議)
3. 実現を目指すこと(改訂作業)_20221030_20230105

<参考資料>

1. システムワークフロー検討作業部会 2022 年度活動報告および 2023 年度活動計画 [当日投影]
2. これからの学術情報システム構築検討委員会規程
3. システムモデル検討作業部会内規
4. システムワークフロー検討作業部会内規
5. これからの学術情報システムの在り方(2019)
6. 図書館システム・ネットワークユーザーグループ実施について(審議)
7. 図書館システム・ネットワークユーザーグループ実施について(規程改定について)
8. これからの学術情報システム構築検討委員会が実現を目指すこと(案)v.12

4. 議事:

議事に先立ち、事務局より第 34 回これからの学術情報システム構築検討委員会(2022 年 10 月 31 日(月)開催)から、本日(2023 年 1 月 30 日(月))までのメール審議について報告があった。メール審議は 1 件で、「次期 CAT 変更点(2022 年 12 月末時点)の参加館アナウンス内容について」¹が、2023 年 1 月 23 日(月)付で承認された。

議事 1. 2022 年度の活動について

- (1) システムモデル検討作業部会 2022 年度活動報告(報告)

資料 1-1 に基づき相原委員より報告があった。

¹ 「次期 CAT 変更点(2022 年 12 月末時点)の参加館アナウンス内容について」は、以下で公開：https://contents.nii.ac.jp/sites/default/files/korekara/2023-01/nacsis-cat_change_2023_20230125.pdf

(2) ユーザーグループの試行について(報告)

資料 1-2 に基づき相原委員より報告があった。つづいて、システムワークフロー検討作業部会(以下、「ワークフロー部会」)主査の飯野委員より、ワークフロー部会委員が、ユーザーグループの SNS(Discord)の試行チャンネルを運用した結果について、以下のように報告があった。

- ・ 資料 1-2 の 5(ウ)について、試行チャンネルで議論を行った際、どの時点で誰が決定するのかの判断が難しかった。この点が明確化されれば、個別課題の方向性を検討し、具体化に繋がれると考える。
- ・ 資料 1-2 の 5(エ)②「試行チャンネルの継続について」は、上記観点から、検討が必要と考える。
- ・ ワークフロー部会としては、ユーザーグループ(以下、「UG」)の運用は、個別課題への意見を広く募ることができる点で、意義があると考え。次年度以降、UG を、個別課題の方向性の検討および具体化に繋げるためのツールとしてどのように発展させるのか、さらなる検討が必要である。

報告に対し、以下の質疑・意見交換があった。

- SNS(Discord)では、スレッドのどこで議論がなされているかが分かりづらいため、ユーザが議論に気付けない可能性がある。「場そのもののデザイン」を来年度の課題として、検討する必要がある。
- 試行チャンネルのうち、「共同調達・運用の実現に向けた図書館システムガイドライン作成」の今後の投稿予定について確認したい。
 - 2023 年 2 月以降に投稿予定である。共同調達にかかる「ガイドライン案」について、意見を聴取する見込みである。
 - ワークフロー部会では、「ガイドライン案」の策定を担当しているので、準備を整え、投稿するよう調整する。
 - 承知した。何か投稿があれば積極的に参加する。

(3) システムワークフロー検討作業部会 2022 年度活動報告(報告)

資料 1-3 に基づき飯野委員より報告があった。

報告に対し、以下の質疑・意見交換があった。

- 数多くの検討がなされており、それらをどのように見せるかというアウトプットが重要だと考える。「これからの学術情報システムのメタデータ収集・作成方針について(2022)」などはひとつの大きなアウトプットだが、その他にも大変興味深い活動がある。今後参加する人の参考になるよう、委員会サイトで部会資料をさらに可視化するなど、見せ方について検討してほしい。

➤ 承知した。

(4) これからの学術情報システム構築検討委員会 2022 年度活動報告(報告)

資料 1-4 に基づき事務局より報告があった。

議事 2. 2023 年度の活動について

(1) 新作業部会の設置とシステムモデル検討作業部会の廃止について(審議)

資料 2-1a,2-1b に基づき相原委員より説明があった。

審議の結果、資料 2-1a について、2023 年度からの新作業部会の設置および 2022 年度末のシステムモデル検討作業部会の廃止に加え、新作業部会名称は、「ユーザーグループ運営作業部会」とすることが、承認された。

また、資料 2-1b について、別紙 1～3 のとおり「これからの学術情報システム構築検討委員会規程」改正および内規を制定することが承認された。資料 2-1b の「検討スケジュール」に基づき進めることとする。

説明に対し、以下の質疑・意見交換があった。

- 資料 2-1a について、システムモデル検討作業部会(以下、「モデル部会」)は、検討が目標に達したということで終了し、新たな部会を作る。モデル部会の枠組みを活かしてミッションを変えることも考えられたが、検討作業の性質を考え、今回は廃止・新部会の設置という形を取った。
- 資料 2-1b 別紙 2 新旧対照表「これからの学術情報システム構築検討委員会規程」において、第 6 条 UG は「置く」、第 7 条作業部会は「設置することができる」としているが、一致しなくてよいか。
 - 作業部会は、設置と廃止があるので「設置することができる」としているが、UG は、増減がない。本委員会では、参画する機関との連携が非常に重要と考え、連携を担保する仕組みとして UG を必ず設置するという意図で「置く」とする。

(2) ユーザーグループ運営作業部会(仮)2023 年度活動計画(審議)

資料 2-2 に基づき相原委員より説明があり、審議の上、承認された。

説明に対し、以下の質疑・意見交換があった。

- 議事 1 で、飯野委員から SNS(Discord)の試行チャンネルを運用した結果、懸念点が示されている。懸念点は、ユーザーグループ運営作業部会の活動を通じて、UG の理解を促し、払拭していく理解でよいか。
 - 共通課題の解決に取り組む体制を作ることが UG の目的である。2023 年度から、イベントを開催し、理解を得て、UG の活動を活発にしていきたい。SNS は、

その場で意思決定を行うツールではないが、SNS と作業部会、サブグループをうまく「使い分け」していく。そうした活動につなげることを、ユーザーグループ運営作業部会の目的としたい。

- 懸念点が改善されるよう、来年度一年間様子を見ていきたい。ワークフロー部会が UG に反対というわけではないことは、述べておきたい。
- 人の意見は多様であり、そうあるべきである。それが可視化されるのは問題ではない。これまでの問題の解決やそのプロセスの蓄積を、UG にどのように反映していくかが、ユーザーグループ運営作業部会の課題だと考える。温度感や悩んでいる点を世に示していくことも大切だと考える。

(3) システムワークフロー検討作業部会 2023 年度活動計画(審議)

資料 2-3a,2-3b に基づき飯野委員より説明があり、審議の上、承認された。

説明に対し、以下の質疑・意見交換があった。

- 資料 2-3a 「(5) 統合的発見環境の整備」について、令和 4 年度国立大学図書館協会近畿地区協会助成事業のフォーラムにて ILL とドキュメント・デリバリー・サービスの発表があり、ワークフロー部会の統合的発見環境班メンバーが報告していた。次期 ILL は要件をかためる段階であると理解した。ILL は、図書館のエンドユーザーに直結しているため関心も深い。統合的発見環境班の情報収集に有益ならば、サブグループ立ち上げも検討してはどうか。
 - 持ち帰って検討する。
- ワークフロー部会の活動は、本委員会の具体的な活動の中心である。今後も活動詳細をオープンにし、本活動への参加を促してほしい。

(4) これからの学術情報システム構築検討委員会 2023 年度活動計画(審議)

資料 2-4 について事務局より説明があり、審議の上、承認された。

議事 3. 「これからの学術情報システム構築検討委員会が実現を目指すこと」について(審議)

資料 3 に基づき、以下のとおり、大向委員長より説明があった。

審議の結果、資料 3 の「これからの学術情報システム構築検討委員会が実現を目指すこと」(以下、「目指すこと」)の「サマリー」について、さらに意見交換を行い、全体調整の上、2023 年 3 月上旬に確定することが、承認された。

説明は次のとおりである。

- ・資料 2-4 1. (ア) (1)「「これからの学術情報システムの在り方について(2023)」の策定」の議論のとおり、「これからの学術情報システムの在り方について(2023)」(以下、

「在り方 2023」)を 2023 年度に作成するため、資料 3 は、これから委員会としての現状認識・課題をまとめたワーキングペーパーとして位置づけ、対外的に打ちだしていくものとする。

・図書館外の人にも理解できるよう、人員が必要などの要求事項は「在り方 2023」でより強く訴えていく必要がある。資料 3 では、図書館外の人やエグゼクティブへの要求事項としてのトーンが弱まるが資料をどう端的にまとめるかという点を考慮して、再構成を行った。

説明に対し、以下の質疑・意見交換があった。

- 「当面の目標・アクションの設定」の当面は、2023 年度内か 2023 年度を起点としたそれ以降を示すのか。また「システムの再構築」以外の箇所の対応が分かりづらい。エグゼクティブを対象とするならば、本ページのみで用語の整合性がとれるとよいのではないか。
- 本資料には、これから委員会の計画や説明に基づく **what** と **how** が必要だと思う。「在り方 2023」は、**what** や **why** であり、「目指すこと」は **how** を示すと思った。デジタルトランスフォーメーションに対応して大学図書館がどうあるべきかのビジョンが「在り方 2023」、どのように実現していくかが「目指すこと」と整理できるのではないか。
- 「在り方 2023」は文章で出しても広く見てもらえない可能性がある。来年度「在り方 2023」を考えるうえで、内容を端的に表す「キャッチコピー」があるとよいのではないか。
 - 「キャッチコピー」とは、まさに「ビジョン」である。「キャッチコピー」を作るため、ブレインストーミングを行いたい。
- この資料上では直接対応しないかもしれないが、委員会の組織の体制として作業部会と班があるが、この表上でどこに対応しているかを可視化できると良い。
 - この資料にかぶさるような形で、作業部会の今の貢献状況などを可視化できれば良いと考える。

議事 4 その他

事務局より、NACSIS-CAT/ILL のリプレイスが、2023 年 1 月 31 日(火)に実施される旨、報告があった。

以上